

(日記) 幌尻岳・アポイ岳・羊蹄山

2011/06/24～30

6/24(金) 東京～千歳空港～白老～京極～ニセコ (GPS 軌跡は[こちら](#))



始発電車で羽田に向かい、旅行社の窓口で搭乗券を受け取るのに意外と時間がかかったものの無事に JAL に乗り、千歳でレンタカーを借りて白老へ。最初は札幌の花フェスタにしていたところ、開会前日なので、KOYAMA さんから無理と言われ日曜日に変更したもの。

白老は、同行する Y の父親が子供の頃にいた土地で、うろ覚えの位置関係を記したものを頼りに、住んでいた場所を推定しようというルーツ探し。花の苗を植えていたおばさんに[尋ねたり](#)して歩き回った結果、[この辺り](#)だろうと推定することができた。改めてゴーストタウンのような人気のなさに感じる。

近くのアイヌコタンに行く。檻の中にある[ヒグマ](#)の大きさに、山の中で出くわすことがないようにと祈る。熊よけの鈴を購入してきてよかったと。アイヌの人達が実演するイヨマンテリムセと呼ぶ歌と[踊り](#)を動画で撮る。

<http://www.youtube.com/watch?v=Wk34Wj7jPqU>

白老からニセコに向かう。京極の町中の食道で遅い昼食。時間が十分あるので、明日登る予定の羊蹄山の登り口へのルートを探る。できれば林道の終点まで行こうとあちこち探るも、登山者用の駐車場から奥へはゲートに鎖があって行けないことが判明。道の駅の[ふきだし公園](#)を散歩。以前に、北海道電力京極揚水発電所を見学した時に来たことがある。

ニセコのホテルにチェックイン。案の定、上記見学で来た時と同じホテル。今回のツアーは、一人 44k¥で往復の飛行機から 7 日間のレンタカーとホテル 1 泊が含まれている。宅急便で送っておいいた荷物を受け取り、温泉に入り、一休みして夕食。話が盛り上がり、酒量も増える。鶴川のシシャモと言うので、鶴川ってどこ？と聞くと、若い女性が調べてきてくれる。基本的に客が少なくヒマそう。ツインの部屋で安眠。

6/25(土) ニセコ～札幌～新冠 (GPS 軌跡は[こちら](#))



7時からホテルの豪華な朝食。主目標たる幌尻岳アタックの火曜日に天気が崩れる予報なので、一日早めて今日の内に札幌経由で新冠に移動することに日程変更。明日宿泊予定だった新冠のユースホステルに電話すると変更 OK とのこと、正式決定。実は、足首周辺の痛みが気になっており、幌尻岳だけ何とか登って、羊蹄山はパスしようかという下心も。

来る直前に見たブログで、今年の幌尻岳は雪が多く雪溪の上り下りが大変との情報があり、札幌で軽アイゼンを購入することに

なり、花フェスタを見ることと併せることに。[蘭展](#)は盛況で、花色が鮮やかなのに感激。北海道蘭協会の役員に[KOYAMAさん](#)の携帯番号を聞き、電話。移動中のようで、明日の予定が変わったことを釈明。今年の山は雪が多く厳しいことを心配してくれる。

白石の秀山荘は大きく立派な店で驚く。まさに軽アイゼンと言うべき小さなものを購入。途中、昨日聞いた鷓川でラーメン屋に寄り、名物のシシャモラーメンを食べる。結構な量なのに、大盛りにした上、チャーハンを追加注文している客に驚く。

新冠ユース hostel で割引券を貰い、レ・コードの湯へ。のんびりした時間を過ごし、ユース hostel に落ち着く。海に行って[写真](#)を撮る。日高本線をのんびり[列車](#)が通る。

持ち込みの日本酒を飲みながら、鹿肉のシチューなど美味しい夕食を楽しむ。夕食付き個室で 4,250円は超格安。

6/26(日) 新冠～奥新冠発電所入口～ポロシリ山荘 (GPS 軌跡は[こちら](#))



朝は 4 時から明るくなるが、余裕で 5 時起床、前日コンビニで購入した握り飯を食べ、これまた前日に苦勞してセットしたカーナビに従い、[YH](#)を後にする。牧場に挟まれた道を 30 分ほど快適に走り、人家が消えてからが大変で、デコボコの砂利道をくねくねと曲がりながら行くので距離がかせげない。加えて、[ダム](#)があるたびに車を停めて写真撮影するので、なかなか進まない。

極めつけは[新冠ダム](#)の湖岸道路で、大きな沢の入江を深く入って戻ったら正面にダムが現れびっくりしたが、それが何と新冠ダムそのもの。實質いくらかも移動していない。道路は全部で 10km 以上あり、結構上り下りがあり、デコボコを避けて走るので速度が出ない。新冠から 2 時間半かけてようやく[奥新冠発電所入口](#)到着。ここに車を置き、登山届けを書き、ゲートの隙間から入る。

一般車が入れないからか、管理が町から北電に変わるからか、路面の状態が良くなり、歩くのも楽。とは言え、ポロシリ山荘までの登り降りのある約 18km の[道](#)を歩くのは、それなりの覚悟が必要で、特にヒグマには要注意とされる。結果的に鹿以外の大型動物に思わずに済んだのは幸運だった。

途中で単独行の中年男性が下りてくると出会う。顔は眼鏡の枠に沿う傷が痛々しく、ザックや衣服が血まみれ。雪溪の下りで滑落し、岩にぶつかったとのこと。幌尻岳山頂を 13 時に出たのにポロシリ山荘に帰着したのが 18 時過ぎで、恐らくしばらく気絶していたのではないかと。雪溪は固くはないとのことで一安心。ピッケルやまともなアイゼンがないと無理、と言うのを話半分に聞く。我々が第一発見者となる遭難事故と紙一重だったものと認識。

[奥新冠ダム](#)からポロシリ山荘までの約 3km は、国土地理院の地図や GPS にある川沿いのゆるやかな登り道と異なり、大きく高巻く林道で、疲れた体にはこたえる。加えて左足首の痛みが酷くなり、明日以降の登り降りに不安がよぎる。

約5時間の歩行でポロシリ山荘着。元々営林署が管理する宿泊施設だったと言うだけあって、なかなか立派な作り。さっそく薪を割り、ストーブに火をつけ、貸切状態を楽しむ。痛む足を引きずって慣れない釣りに。毛針を下ろした途端に食いつきがあり、引き上げようとしたが、逃げられてしまった。あまり大きくはないが、間違いなくイワナの姿が一瞬見えた。しかし、その後、翌日を含めて一度も当たりがなかったのは、まさにビギナーズラックか。餌釣りの仕掛も持参したが、使う気が起こらなかった。

16時の天気図では、明日は移動性高気圧の後面になり、台風の影響もなく、登山日和が期待できる。つまみや野菜サラダに手を伸ばしながら、泡盛とウイスキーのお湯割りを飲み、レトルトのご飯の豪勢な夕食を楽しむも、雪渓を中心とする不安は否めない。左足の痛みに対応するため、もし膝が痛くなった場合として医者処方して貰った湿布を貼り痛止薬を服用。結果して、これが非常に効果的であった。

翌朝3時起床を目途にそろそろ寝ようという19時頃、外が騒がしくなり、帯広の方から縦走してきた6人のパーティーが到着。内2名がガイドで、難所の雪渓ではザイルで確保しながら下ったために時間がかかった模様。例のブログは彼等で、2週間前に来た時より雪がずっと少なくなっていて、標高1600mの水場になる場所から1800m付近までが雪渓で、その上は夏道が出ているとの情報を聞き、イメージが明確に。

これから夕食の用意をするというのを聞きながら、二階で寝袋にくるまる。下でがんがん火を焚くので暑苦しかったが、その内に眠る。

6/27(月) 幌尻岳登頂 (GPS軌跡は[こちら](#)) (カシミール地図上の軌跡は[こちら](#))



3時に起床。昨夜は、寝袋に入った初めこそ暑くて寝苦しかったものの、林道歩き疲れもあって熟睡し、明け方は少し寒いくらいで、ガラス窓から見える空が薄明るくなり、気持ちよく目が覚める。下の階でガイドがストーブの火をおこしているのは、我々が早起きするのを承知してのことのようで、感心する。

一階の土間の暗がりの中、レトルトのご飯と野菜丼を温め、結構まともな朝食。4時過ぎには出発。小屋の屋根の向こうに見える雪の着いた尾根には昨日と違いガスがかかっておらず、高曇り

状態で風もなく、絶好の登山日和。雨露を払いながら進む。

幌尻沢が二俣になる渡渉地点は、昨日のおじさんに教えて貰ったとおり、少し手前で大きな流木の上を右岸から左岸に渡り、合流点直上流で右岐を石伝いに渡ると、かなり流量があっても足を濡らさずに行くことができる。持参した渡渉用の地下足袋が無用に。そこから急登が始まるが、先の不安があるので、[着実](#)に高度を上げて行く。

対岸に見える[ピーク](#)が朝日を浴びて輝くを見て、ペテガリ岳かイドンナップ岳かと色めくが、登るにつれてどちらでもないことが分かり、帰宅してカシミールで調べてナメワッカ岳(1799.5m)と知る。ダケカンバ主体の疎林の中を急にトラバースする標高1620m付近の[水場](#)に7時過ぎに到着。今は雪が沢を埋め尽くしている。

夏道はこの沢を渡り、少し登って対岸の尾根にとりつくが、上部でどうせまたこの沢に戻るなので、そのまま[雪渓](#)を登る。用意した軽アイゼンをしっかり取り付け、先頭を交代しながらキックステップを切り、ゆっくり登る。100m

強上がるのに1時間ほどかかり苦しい。GPSのお陰で[雪渓上](#)でも夏道との関係が明確なのは大いなる安心材料。下りが思いやられ、樹林帯の中を藪コギする案も出る。

8時半頃、1770m付近で夏道が完全に露出し、軽アイゼンを外しホツとする。[見下ろせば](#)奥新冠湖や渡渉地点がはるか下に、日高山脈南部び連山が見渡せ、遠く海の方はガスがかかっている。大岩の右側を登りながら、[高山植物](#)を撮る。スローバツステディの精神で進み9時半頃ようやく稜線にたどり着き、額平川ルートと合すると急に道が良くなり、空中散歩の趣で頂上に向かう。

9:40 遂に幌尻岳頂上に到着。永年の懸案だった北海道2,000m以上10山の残りひとつをようやく達成。控えめながら深い喜びを[記念写真](#)に収める。一人ずつ交代で撮り、帰宅後に合成する。360度の展望は素晴らしく、[夕張](#)や[大雪](#)の山々、名も不確かな[日高山脈の山々](#)が、熊以外は人っ子一人いない中、我々を歓迎してくれている。学生時代に登ったペテガリ岳はカムイエクウチカウシ山の陰になって見えないことが、これまた帰宅後にカシミールで判明。

食パンとチーズとイチゴジャムに加え、粉末を溶かしたスポーツ飲料が最高のご馳走。心配した足の痛みも全く感じられず、ジェネリック薬品に感謝。誰も登って来ない気配から、一般的だが渡渉の多い額平川コースが雪解けの増水と冷水で敬遠ないし禁止されているのかと想像。それには新冠コースに殺到しないのも不思議。100名山の中でも困難性が高いとされる理由を納得。

そろそろ下りが心配になり始め、登りと同じルートであの雪渓を下るのは、林道ですれ違ったおじさんの二の舞になる可能性があるので避け、なるべく夏道沿いに行くことに決定。10:20頃頂上を後にする。[ヒダカイワザクラ](#)や[ミヤマキンバイ](#)などに癒されつつ下る。

実際には、夏道のほとんどが雪の下だったので、雪と草付きの境目あたりをハイマツを掴みながら下降。先行するYが急に見えなくなったと思ったら、ハイマツを掴み損ねて雪面を滑落、大事に至らず停止。続いてFも無理に雪面を下り滑落し草付きで停止。その後は、軽アイゼンを付けたまま、なるべく草付きを慎重に下り、最後の部分のみ登りに使ったステップを下る。12:40頃水場に到着し、最大の難所を過ぎたことで安堵。

こんな所を良く登ったものと感心しつつ急傾斜を下り、渡渉地点を過ぎる。登りには分かりやすかった流木渡りの場所が下りでは見つけにくく、この場面でもGPSが活躍。最後はのんびりした道を、熊よけの鈴を鳴らしながら下り、15時少し前に誰もいないポロシリ山荘に帰着。全所要時間11時間という近年希に見る長時間歩行を完遂できた充実感に浸る。

ストーブに薪をくべて濡れたものを乾かし、食事をし、飲みながら四方山話をする。今宵も熟睡できそう。

6/28(火) ポロシリ山荘～奥新冠発電所入口～新冠



空が明るくなる4時頃起床。重い雲から雨がぱらついて、昨日の内に登っておいた決断の良さを再確認。ガスで湯を沸かし、アルファ米を緩め、レトルト食品を温める。ゴミ類は最初からストーブで燃しているのに、片付けるといくらでも出て来る。荷物のパッキングに手間取り、5時過ぎの出発となる。

全体としては下りだが登りも結構あり、涼しいながら湿度の高い中、汗をかきながらの林道歩きとなる。無我の心境というか、一定速度で歩いている内に時間を忘れるような気がする。それでも、休めばしっかり疲れていることが分かる。

途中、北海道電力関連の車とすれ違う。ワゴン車が二台と空のトラックで、流木処理の作業と見る。林道の急傾斜部はコンクリートが流してある。1ヶ所、崩壊して鉄板を敷いてある場所があった。鈴の音は響くものの、熊や鹿など動物の気配はない。向こうの方が先に認知しているのかも知れない。

いこい橋のゲートは開けたままになっていたので休む機会を逸し、駐車場まで2回の休み4時間強で約19kmを歩きで通した。足にマメもできず、どこも痛くなく、二人ともタフな体であることを感謝。まだ9時半。

勝手知ったる道ではあるものの、時々車の腹をするような穴ぼこだらけの砂利道で、思うようには進まない。悪路の登りでガソリンが急に減っていて心配したが、結局大丈夫であった。ようやく携帯が通じるまで出てきたので、ユースホテルに電話し、今晚の宿泊をお願いする。無理ばかり言うのに、いつも快く受け止めてくれるのに感謝。

11時半過ぎにファン・ホース新冠YH到着。ガソリンスタンドの場所を聞くと、新冠では料金が表示されていないので恐ろしいので静内のセルフがおすすめとのこと、ついでに美味しいラーメン屋の場所も聞き、前回と同じく温泉の割引券を貰う。

汗臭いまま、教わったラーメン屋へ行く。食べていると猛烈な雨になり、こんな時に雪渓上をウロウロしなくて済んだことをありがたく思う。レ・コードの湯は、牧場を借景にした露天風呂が素晴らしいアルカリ温泉で、すっかりつるぐ。明日の朝食用に握り飯など買う。

YHの夕食では、同宿のバイクと自転車でツーリングしているリタイヤー組と情報交換。皆さん、色々と工夫していることを知る。一人は温泉に行き、どちらかという話し相手に飢えている風のもうひとりとおつきあひする。二人で二晩で一升なので、それ程飲んではいない。清潔なベッドで熟睡。

6/29(水) 新冠～アポイ岳～京極 (GPS軌跡は[こちら](#))



早寝早起きが定着し、快適に目が覚める。YHの部屋の中ながらガスコンロでお湯を沸かし、味噌汁と握り飯の後でコーヒーまで楽しむ。早朝の国道336号を南下し様似の先、[アポイ岳ビジターセンター](#)を目指す。約1時間で到着。

厚い雲に覆われ湿度が高い中、良く整備されてはいるものの昨日の雨でぬかるんでいる登山道を上る。トドマツやエゾマツなどの樹林帯を進むこと小一時間で避難小屋に到着。[ここ](#)からは木が低くなり、雲がなければ頂上も見渡せて、尾根筋を行くため風

もあり高山植物も現れるので、格段に気分がよくなる。

[エゾコウゾリナ](#)はアポイ岳特産の珍しい植物だがふんだんにあり、中にはとても形の良い姿のものがあって写真に収める。[アポイハハコ](#)はタカネヤハズハハコの変種で大型なのだから、花が咲き始めたところで全開ではないが、とても存在感がある。[アポイヤマブキショウマ](#)は他のものと較べて株が全体に小型で葉の鋸歯が大き

いのが特徴。[アポイアズマギク](#)はミヤマアズマギクの変種で、咲いていたものは花卉の色が根元が濃く先に行くほど薄い小豆色で、白か赤と言われる花色と異なるので、もしかすると別物かも知れない。

小屋から1時間半で標高811mの頂上に近づくと、それまで森林限界を超えていたのに急に[ダケカンバ帯](#)に入り、不思議な霊気を感じる。アイヌがここで火を焚いてお祭りをした理由が分かるような気がする。そう言えば幌尻山頂付近でも不思議な高揚感というかふわっと宙に浮くような気分がして不思議に思ったが、山のピークには人の五感を刺激する作用があるのかも知れない。

後で気づいて失敗したと思ったが、頂上から南下する尾根を下り途中でトラバースして元に戻るルートがあったのに、気づかずにそのまま元来た道を降りてしまった。登ってくる人がどんどんいるので感心する。途中、[様似方面の海岸](#)がぼんやり見えて、本来なら眺めの良い山と知る。

避難小屋の横には[橄欖岩の露頭](#)があり、マグマが直接固まったという岩を触って地質年代を実感する。ビジターセンターで売っていた橄欖岩の置物は実に重いもので、こういう比重の高いものが地下から出て来る仕組みを不思議に思った。

ビジターセンターでは、先ほど見た花の多くがアポイ岳特産と知り、改めてその素晴らしさに感動。できれば、登る前に今咲いている花の名前が入ったパンフレットを配布して貰えればもっと良いのに、とわがままなことを思った。

先ほど車で通過したときに綺麗な町並に感心した浦河で、昼食をとることにする。今日はラーメンでなく新鮮な魚が食べられるところを探す。地元の人に聞いて、松山という元旅館の料理屋に入る。海鮮丼を注文して待っている内に、マツカワづけ丼にすべきだったと反省する。

マツカワとは地元特産のカレイのことで、王蝶と呼ばれる高級魚のため、お定まりの乱獲で幻の魚になりかけていたところ、種苗を育成して放流する努力をした結果、一、二年前から市場に出回る程になったとのこと。とかく単純な一次産業に頼りがちな北海道で、こうした付加価値の努力を見るのは嬉しいこと。

静内の手前の三石で名物の昆布羊羹をお土産に買う。後で食べてみると、昆布の食感がある以外は特段変わったものでもない。昨日レ・コードの湯に置き忘れた傘を回収。日高国道を淡々と走る。日高で高速道路と並行するようになると、道幅も拡がりカーブも少なくなり、快適に飛ばす。

苫小牧のバイパスで信号停止が多くなり、Yから声がかかるも「大丈夫」と答えたが、本当は少し休むべきだったかも知れない。支笏湖道を市内から外れようとするところで突然旗を振る警官。しまったと思った時は遅く、制限時速50kmを21kmオーバー。長年続けたゴールド免許が露と消える。

いつも捕まるのは北海道ばかり。中央分離帯あり、片側2車線、歩道付きなのに50km/hとは、でも捕まるこちらが悪い、と気を取りなおして京極に向かう。5日前に下見した道の駅に駐車し、歩いて近くの温泉施設に。

食堂のラストオーダーが19時で今18時なので、15分で汗だけ流す。生ビールで乾杯。食事をしながら3杯飲むと、もう一度入浴する気はなくなり、心地よい涼しさの中、衣類やタオルを入れた袋をぶら下げ、今宵の宿となる駐車場へ戻る。

ここで夜を過ごす人が結構いる。Yは車の中、Fは外で寝ることにする。湧水池の近くのためか蚊が多いので、先ほどの湯の近くにあったコンビニに虫除けを買いに行く。木製のベンチを東屋の下に動かし、寝袋に潜り込む。寝返りを打っても落ちないので快適。翌朝まで熟睡。

6/30(木) 京極～羊蹄山～京極～千歳空港～東京 (GPS 軌跡は[こちら](#))



午前4時に起床。Yは車の中で蚊と格闘したとか。ガスコンロで湯を沸かし、アルファ米をほぐし、レトルトのカレーを温め、味噌汁を作る。相変わらずたっぷりした朝食は元気の元。

京極コース登山口の駐車場に着く。まだ誰も来ていないが不思議にも思わず、登山届を書いて5時半頃歩き始める。頂上を含め山がうっすら見えているが、湿度が高く風もなく、あまり快適ではない。標高差約1,500mの上り下りはひたすら忍の一字。

急なところはつづら折りになり、良く草刈りしてあり、1合ごとに標識があり、なかなか登りやすい。疲れが溜まっているはずなのに、あまり足が重くないのは、毎晩しっかり眠っているのと、一定のペースで歩くことに慣れてきたからかと思う。

標高1,360mにみごとなシラネアオイがあった。特に大型の花が5輪ほど咲いていたが、これは色が薄かった。その他、[マイヅルソウ](#)、[ノウゴウイチゴ](#)、[ツバメオモト](#)、[サンカヨウ](#)、[エンレイソウ](#)など珍しくはないがしっかりした高山植物が結構多く、1,700mほどからやっと切れる森林限界以上で、[ユエゾツガザクラ](#)、[イワウメ](#)、[ミヤマキンバイ](#)などが見られ、自然度が高いことを確認。

途中三度休んで、登山口から約4時間でガスで視界のない頂上に到着。登山客が多いのに驚く。少し休んだだけで下る。七合目で昼食。食パンにピーナッツバターがうまい。今回、水はポカリスエットの粉末を溶かしているので、がぶ飲みしないし体液のバランスが崩れる不快さもない。効いているかどうかは分からないが、登山用サプリメントもしっかり飲んでいる。

年寄りの男性に続き、中年女性の声が降りてくるので、慌てて歩き始める。かなり飛ばしたはずなのに、三合目で休むと、すぐに追いつかれる。我々の後を追うように往復している中高年登山ツアーの連中で、なかなか達人な足。登山口に大型の車が待っていて、風呂にも入らず千歳空港に向かう様子だった。

12時半頃、登山口帰着。全登山行程を無事終了。京極温泉でゆっくり汗を流し、宅急便で送る荷物を仕分けし、20分ほど仮眠し、TVを見たりして、16時前には出発。途中、きのこ王国で宅急便を出し、100円のキノコ汁を味わい、18時頃レンタカーを返却し、千歳空港で祝杯。閉まりかけた店で土産を買い、JALのラウンジでおかきをつまみに生ビールや焼酎を飲んで時間つぶし。最終21時過ぎの便で北海道を後にした。

(了)